授業力をみがく

英語編

# ペア・ワークを生かしたコミュニケーション能力の育成（中学校）

## ～小学校と高等学校における外国語科の学習を意識して～

PROFILE

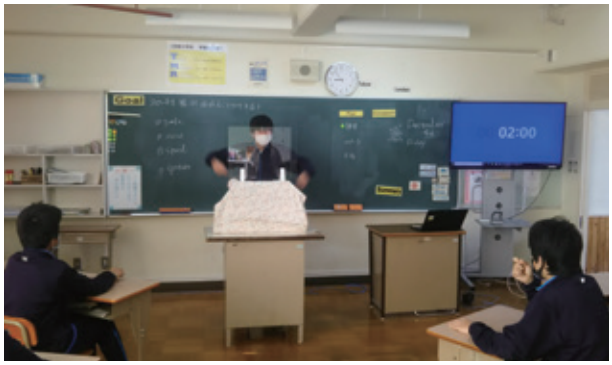
**瀧澤 義守** たきざわ よしもり（北海道登別市立西陵中学校長）

1965年、北海道生まれ。北海道教育大学卒業。北海道公立中学校教諭、北海道教育委員会指導主事、北海道公立中等教育学校教頭、北海道公立中学校教頭。2016年函館市立北日吉小学校長、2018年から現職。
編著「小学校外国語『二大テーマ』に答えます」（新興出版社啓林館）。
著作編修関係者・中学校外国語科教科書「BLUE SKY English Course」（新興出版社啓林館）。

## 1 中学校外国語科の目標

小学校においては、昨年度から外国語が教科となり、新学習指導要領のもと、教科書を主たる教材とした授業が行われています。

中学校においては、今年度から新学習指導要領が全面実施となりました。英語科では、外国語科の目標を踏まえ、五つの領域（「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと［やり取り］」、「話すこと［発表］」、「書くこと」）別に設定する目標の実現を目指した指導を通して、コミュニケーションを図る資質・能力を育成することが求められています。




第2学年 スピーチ「将来の夢」（2020年12月）

## 2 小学校での学習内容の把握

2016年12月の中央教育審議会答申には、次の課題が示されています。

> 中・高等学校においては、文法・語彙等の知識がどれだけ身に付いたかという点に重点が置かれた授業が行われ、外国語によるコミュニケーション能力の育成を意識した取組、特に「話すこと」及び「書くこと」などの言語活動が十分に行われていないことや、生徒の英語力では、習得した知識や経験を生かし、コミュニケーションを行う目的・場面・状況等に応じて適切に表現することなどに課題がある。

小学校の高学年は、第5学年・第6学年とも年間70時間（標準時数）の授業の中で、Small Talkや五つの領域にかかる多くの言語活動を行っており、中学校においては、入学時から段階的にその要求度を高め、様々な言語活動に取り組む必要があります。

そのため、中学校の英語科教員には、中学年時の外国語活動を含めた小学校4年間で210時間（標準時数）の学習内容を把握することとともに、「授業は英語で行うこと」を基本とした、高等学校への橋渡しとなる指導につ

いて、これまで以上に意識し重視していくことが求められていると考えます。

本校では、小学校での学習内容を踏まえて、中学校入学時からWarm-upにおいては、Canや過去形が含まれる英文を使って、教師は生徒との対話等を行っています。

また、中学校の早い段階から、小学校で学んだ表現を取り上げ、音声で十分慣れ親しんだ過去形を読んだり、書いたりできるようにしたり、過去形の使い方の理解を深めたりしながら、別の場面や異なる表現の中で活用できるように指導しています。

## 3 ペア・ワークの実際

本校では、2017年度から校内研究において、「小集団での協働的な学習」を研究内容の一つとしており、英語科では、「効果的なペア・ワークやグループ・ワークの在り方」について研究を推進しています。本校には英語科の教諭が2名おり、それぞれが英語科授業専用のEnglish Room（2室）において、生徒個々の学習状況を踏まえた座席配置（ペア・ワークを意識した座席）のもと、授業を行っています。

「話すこと［やり取り］」における言語活動は、話し手と聞き手による双方向のコミュニケーションであり、「協働的な学習」といえます。このことも踏まえて、新出の文法事項やKey Sentenceの定着など本時のねらいを達成するための活動はもちろんのこと、授業開始時のWarm-upや教科書本文の音読、「話すこと［発表］」や「書くこと」にかかる言語活動においても、ペアによる様々な活動を取り入れることにより、コミュニケーション能力の向上を目指しています。

なお、第1学年入学時から英文を発話したり、本文を暗唱したりする際には、できる限りジェスチャーを付けて発話するよう指導しています。その理由は、ジェスチャーをもとに単語のイメージをもったり、教科書の本文をジェスチャーを介して覚えたりなど、身振り手振りを取り入れることにより、そのことが内容把握につながるとともに、本文の再生につながると考えるからです。また、スピーチをする際には、アイコンタクトや姿勢、表情などに加えて、聞き手に問いかけることに留意する必要があることから、このジェスチャーを取り入れての練習や言語活動を繰り返すことが、生徒にとって自然なこととなり、ひいては、望ましいコミュニケーション能力の育成に結び付くと考えるからです。

学習活動の具体としては、教師のモデルに続いて全体でジェスチャーを付けながらRepeatしたあと、ペアで練習をします。新出単語の発音や教科書本文の音読、スピーチ（発表）の練習を1名がジェスチャーを付けて発話し、もう1名がチェックするという形で行います。ペアでの活動中、教師は机間指導を行います。

第3学年 関係代名詞を含む英文を使ったペア・ワーク（2020年12月）

今回の改訂において、生徒が英語に触れる機会を充実させるとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とすることが中学校でも求められています。また、生徒には、「言いたい」内容を即興的にやり取りしながら、既習事項を活用しての英語運用が求められています。

隣の席の生徒との英語を使っての様々な活動を取り入れることにより、「英語を使うことが楽しい」と実感できる授業を構築し、コミュニケーション能力の育成を図り、高等学校へつないでいきます。


**引用・参考文献**

・文部科学省（2017）『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語編』